

# 「ふん尿をまいて逮捕された」イラン人男性が語った入管生活の「限界」

深掘り

鵜塚健 社会 | 新着 | 茨城

毎日新聞

2021/1/2 10:00(最終更新 2/5 22:22)

有料記事 3951文字



多くの外国人が長期収容されている東日本入国管理センター（牛久入管）の入り口＝茨城県牛久市で  
2020年6月、鵜塚健撮影

東日本入国管理センター（茨城県牛久市、略称・牛久入管）に4年半近く収容されていたイラン国籍の男性（54）が2020年11月、自身のふん尿で牛久入管の施設を汚したとして建造物損壊罪で起訴された。長期収容で極度のストレス下にあり、「施設の医師から繰り返し嫌がらせを受けて、このままでは死んでしまう」とも訴えていた。支援者によると、同じようなことはこれまで何度も起きているという。人をそこまで追い込んでしまう入管での生活とはどんなものなのか。罪はどこまで問われるべきなのか——。男性との面会を

重ね、考えた。【鵜塚健/統合デジタル取材センター】

男性の名前はヤドラ・イマニ・ママガニ被告。県警牛久署の調べや本人の話によると、20年9月1日、牛久入管の2階にある医務室近くの待合室で、ビニール袋に入れた自身のふん尿をまき、壁や天井を汚し、44万2156円（その後増額）の被害を与えた疑いで牛久署に逮捕され、水戸地検による起訴後も牛久署の留置場で勾留されている。

ママガニ被告は、日本での在留資格がないとして16年7月から牛久入管に収容されていた。20年春ごろから各入管は新型コロナウイルス感染拡大予防のため、徐々に被収容者の仮放免（移動制限など条件付きで一時解放する措置）を進め、「3密」解消を図っている。牛久入管でも300人程度いた被収容者が100人前後まで減ったが、ママガニ被告は対象外だった。仮放免の条件や基準を入管側は一切明らかにしていない。

「動物虐待やいじめも問題だが…」

11月の逮捕前、ママガニ被告が支援者に送った直筆の手紙にはこう書かれている。

拝啓

田中喜美子様へ

こんなにまことに  
何時も一方からお世話をあずかり  
心より深謝致してあります。誠に  
有り難うござります。

さて、ここでの生活を一日増しに酷く  
なっていきます。現在4年4ヶ月目に開じぬかれ。

精神的にも肉体的にも色々追い詰め  
られて、毎日辛いです。

新聞やテレビを見ると社会ではペット  
や野生動物の虐待や苛め等に社会  
の皆様が関心をもって問題にしたり、  
採り上げられて裁判所や警察署訴え  
られていく事すげ。ここで収容されてい  
る難民達がどんなに酷い目にあつて  
も虐待されていることをどうにもかぎりないです。  
ここで不正を行なっていることを警察署に訴えたいです。

どうかこれかかを変わらぬ御指導を  
宜しくお願ひ致ります。

敬具

乱筆乱文お許しください。

令和2年11月1日記

2B-203 やドラ マニヨリ

入管にいた時に書いた手紙です。



ママガニ被告が支援者にあてた手紙。「精神的にも肉体的にも追い詰められて、毎日辛いです」などとつづられている

に起きており、体調を崩したり摂食障害になったりする人も多い。

それでもなぜ自身のふん尿をまくまでに至ったのか。記者は牛久署3階にある面会室でママガニ被告と3回にわたり面会した。透明のアクリル板越しのママガニ被告はいつも白い長袖シャツにジヤージー姿。かなり丁寧な日本語を話す。時間は1回15分で、会話の録音はできず、真っ白な紙に鉛筆でメモすることしかできない。

## 医師から「あなたの命、私の手の中にある」

「あの時は普通の自分じゃありませんでした」と、ママガニ被告は言った。ママガニ被告が3回の面会で語ったのは次のようなことだ。

周囲で仮放免が相次ぐ中、自分は出られる兆候が全くない。絶望的な気分になった。そして、20年6月に入管に着任した男性医師から繰り返し罵倒されたり、嫌がらせを受けたりした。体調が悪化し、薬の処方を文書で依頼したところ、こんな言葉が返ってきた。「あなたの命、人生、私の手の中にある。気にくわないなら、日本から出て行け」

「新聞やテレビを見ると、社会ではペットや野生動物の虐待やいじめ等に社会の皆様が関心をもって問題にしたり、取り上げられていますが、ここで収容されている難民達がどんなにひどい目にあっても虐待されていることもどうにもならないです」（一部略）

ママガニ被告は牛久入管から繰り返し支援者に手紙を書き、収容生活の苦しみをつづっているが、その日本語の文章は「平素は格別のご厚情を賜り…」「どうか今後ともご指導ご鞭撻（べんたつ）の程（ほど）よろしく…」などと丁寧で、内容も論理的だ。

支援者らによると、入管での生活は単調で自由がない。運動時間は1日45分だけ。18時間は部屋から出られない。反抗的とみなされると懲罰房に入れられる。ハンガーストライキも頻繁



あるイラン人風刺画家が描いた東日本入国センター（牛久入管）の様子。ハンガーストライキをするなどし、体調不良になる人も多い=茨城県つくば市で2020年12月、鵜塚健撮影

医務室の壁際に追いつめられ「お前は犯罪者だ」などとなじられたこともある。怖くなつて目を閉じると、むりやり目をこじ開けられ「目が見えないのか」とののしられた。同じ医師の指示のもと、職員に体を押さえつけられ、ろくな説明もなしに点滴をされたこともある。泣き叫んでもやめてくれなかつたという。「私たちは、いらないゴミのようです」。この医師が来るまではもらえていた精神安定剤や目薬も十分に処方されなくなつた。

食事が全くのどを通らなくなつた。「もう死んでもいい、生きていても意味がないという気持ちになつてしまつたんです」とママガニ被告は語つた。

この医師については、他の被収容者からも同様の訴えがある。現在は仮放免中で収容中はママガニ被告と面識もあった日系ブラジル人、アンドレ・クスノキさん（34）は長期収容で食事が取れないほど体が弱っていたが、この医師から「外に出たいから、ハンガーストライキをやっているんだろう」と疑われ、「面会も中止にするぞ」「死ぬまで出さない」「お前、国に帰つた方がいい」などと言われた。「私も死にたい気持ちになつた。人間には我慢の限界がある。（ママガニ被告も）きっと限界になつたのでしょう」とおもんぱかる。

こうした訴えが事実とすれば、この医師の行為は極めて問題だ。入管側は把握していないのか。牛久入管総務課の担当者は「被収容者から訴えがあるとは聞いておらず、調査もしていない」と話す。

## 難民申請を却下され、国にも戻れず

ママガニ被告はイラン北部にある人口約1万人の町ママガンの出身で、7人きょうだいの末っ子。まだ20代のころ、1992年に来日した。バブル景気の終盤で日本では人手不足が深刻化していた。一方、イラン・イラク戦争（1980～88年）後のイランでは経済が疲弊し、多くの若者が働く場所を求めていた。当時、日本とイランの間では相互にビザが免除されており、多くのイラク人が来日し、主に建設現場などで他の外国人とともに日本経済の屋台骨を支えた。

ママガニ被告は解体業、プラスチック工場勤務などを経て、日本の3大石材産地として知られる茨城県桜川市（当時は真壁郡）の石材店で住み込みで長く働いた。「社長には家族のように扱つてもらい、食事や温泉に連れていくつももらつたこともありました」と懐かしむ。

ママガニ被告がおぼろげに覚えていた名前を頼りに探し当てた石材店の男性社長は、ママガニ被告について「力仕事もいとわず、長い間本当によく働いてくれた。どんな事情があったかよく知らないが、出てきたら何か力になりたい」と話した。

ママガニ被告は日本に来てからキリスト教に改宗。母国の両親も亡くなり、6人のきょうだいとも音信不通だ。イスラム教シーア派を国教とするイランでは、改宗は罪とされる。日本政府に難民認定を申請したが、却下され、再申請の準備中だ。「国に帰れば石打ちによる死刑になるかもしれない。ずっと日本にいたいんです」

### **長期収容「誰でも精神を病んでしまう」**

25年間にわたり、被収容者との面会活動を続ける「牛久入管収容所問題を考える会」代表の田中喜美子さんによると、ママガニ被告のようなケースは珍しくないという。「ふん尿を壁にこすりつけたりする人は何人もいて、病院に送られた人もいます」。そして、こう続けた。「収容されて半年以上たつと、多くは精神を病んで摂食障害などで体もぼろぼろになります。4年以上も拘束するのは世界的に見ても異常です。彼も他に抗議する手段がなかったのではないか」

また、やはり被収容者の支援をしている「収容者友人有志一同（SYI）」の柏崎正憲さんも「ふん尿をまくに至った背景を考えるべきでしょう。長期収容で追い詰めておきながら、犯罪者扱いするのはおかしい」と語る。これら2団体は、ママガニ被告の罪が少しでも軽減されるよう、約100人からカンパを集めて入管側に被害弁償を申し出ている。

日本での難民申請者に対する難民認定者の割合は毎年1%以下。先進国の中では際立って低く、「難民鎖国」とも言われる。難民申請が拒否され、送還を拒否すると多くが入管に無期限で収容される。期限なしの長期収容は世界的にも異例だ。国連人権理事会の「恣意（しい）的拘禁作業部会」は20年9月、難民申請中のクルド人ら2人に対する無期限収容を「国際人権法違反」とする見解を示した。コロナ対策で仮放免は進むが、仮放免中は就労が禁止されているため、入管施設を出たとしても生活は極めて困難だ。

一方、政府は次期国会で、退去強制処分を受けても帰国しない外国人を罰する「送還忌避罪」を盛り込んだ改正入管難民法の成立を目指している。しかし、送還忌避罪は、迫害の危険がある国への送還を禁じる国際規定「ノン・ルフーマン原則」に反する恐れがあり、難民支援者や各地の弁護士会から強い懸念の声が上がっている。

### **「入管より留置場の方がいい」**

ママガニ被告の裁判は21年2月3日、水戸地裁土浦支部で開かれる見通しだ。判決後、もし入管から出られたら、どんな人生を歩みたいか聞いてみた。「多くの日本人がこんな私に会いにきてくれたり、助けてくれたりして本当に感謝している。頭が上がりません。だから、日本でボランティアをしてお年寄りや体の悪い人たちを助けたいんです」

収容7年のネパール人、4年以上のパキスタン人、ラオス人、ベトナム人……。支援者によると、牛久入管では1年以上収容されている人が大半を占める。日本社会になじみ、日本語能力や仕事のスキルが高い人も多い。



ママガニ被告が勾留されている茨城県警牛久署 = 茨城県牛久市で2020年12月、鶴塚健撮影

長期収容は本人の心身の状態を悪化させるだけでなく、膨大なコストもかかる。それよりも、少しでも日本社会で能力を生かしてもらうすべを個別に考えるほうが、本人にも社会にも双方にメリットがあるのでないだろうか。

ママガニ被告は警察の留置場で年を越した。「入管はあちこちに監視カメラもあるし、医師の嫌がらせもある。こっちの方が安心感がある」と力なく語る。「入管では何かの作業があるわけでもなく、私たちは役に立たない道具のようです。クリスマスも正月も関係ない。また、日本で普通にお正月を迎えるですね。もし、生きていたらですけど」

## あわせて読みたい



Benkeiタクシードライバーの給料が公開され、皆驚いています

(PR) Search | Red Gobo



武田総務相「記憶がないと言え」発言、可能性認め陳謝



「幸せそうな人ばかり」お母さんがこども食堂で泣き出した理由とは

(PR) gooddo(グッドゥ)



千葉知事選「歴史的大敗」の自民 コロナ対策に不満な国民の声?



自分をクビにした父を見返したい 三代目の不屈の精…

(PR) クラウド活用ならビズヒ…



日本の貧困率が先進国で最悪レベル、貧困の子ども…

(PR) gooddo(グッドウ)

「ワクチン=切れ」の IOC、日本に不満 五輪…

「私が働けば、家族が助かる」だまされ、売られて…

(PR) gooddo(グッドウ)



「幸せそうな人ばかり」お母さんがこども食堂で泣…

(PR) gooddo(グッドウ)

伊藤かずえさんが30年乗る愛車「シーマ」、日産が…

郵便ポストに弁当のごみ 英国籍の容疑者「ごみ箱…



「これしか着る服がないの」小学3年生みずきち…

(PR) gooddo(グッドウ)

第63回グラミー賞授賞式



北海道2区補選 元地元民放アナ、鶴羽佳子氏が立…

自分をクビにした父を見返したい 三代目の不屈の精…

(PR) クラウド活用ならビズヒ…



「幸せそうな人ばかり」お母さんがこども食堂で泣…

(PR) gooddo(グッドウ)



「実家を売るか」思い出深い実家の売却相場をこつ…

(PR) リビンマッチ



第1日第2試合 明徳義塾（高知）—仙台育英（宮…

白鷗大新学長に北山修氏 「ザ・フォーク・クルセ…

「これしか着る服がないの」小学3年生みずきち…

(PR) Learning for All on g…

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.